

# 私の宝物

広島県

仁方剣友会

中学1年 後藤美羽

「先生はいつ死ぬかわからんけど、みんなはまだまだ生きられるんじゃない、一日一日を大切にせんといけんよ。」宮廣先生は、なぜかその言葉を時々、私達に冗談を言うように話していた。でも、私の心の中では、宮廣先生が必死に笑っているようにも見えた。まさか、この言葉が現実になるなんて、その時は誰も気付くことなんてできなかった。

今から約一年前、私はいつもと同じように先生に言われたことをただやって、何も考えずに剣道をしていた。四年生頃に習い始めた私は、みんなに追いつけなくて、ずっと打たれっぱなしで、稽古がある日の夕方になると「ねえ、ママ剣道行きたくない。」と、毎回のよう母の後ろにくっついて、泣きそうな声で言い続けていた。どうせ、無理やり連れて行かれると、自分でわかっていたのに。

稽古が始まると、いつも少し遅れて宮廣先生が来られていた。宮廣先生が特に大切にしていたのは、文武両道という言葉。剣道はできていても、勉強ができなければだめ。逆に、勉強ができていても、剣道ができなければだめ。宮廣先生は私達にそう言い聞かせていた。

だから、私は、学校で、一年間の目標を書くときには、その日から必ず、文武両道と書くことに決めた。勉強は毎日、ノートにすき間がなくなるまで書いて、好きではなかった剣道も、注意されたことは帰って、剣道ノートに書くようにした。すると、ある日、個人戦で、メンを一本とることができた。仲間が、「よくやったじゃん。」と、一緒に喜んでくれた。宮廣先生も、仲間と同じように声をかけてくださることはなかったけれど、笑顔でうなづきながら、拍手してくださった。その時、私は初めて剣道の楽しさを知った。今まで味わったことのない達成感のようなものを感じたのだ。それからは、毎回稽古に行くのが楽しみになって、毎回、宮廣先生が、竹刀を持って経く走って、私達の方へ来てくださる姿を見ると、今日も頑張ろうと思えるようになった。

四月に入って、いつもは稽古がある火曜日。

この日は、仁方剣友会の親達と、先生方が集まって、話をする日だった。私は、家で妹と一緒にテレビを見ていた。(次は、宮廣先生に、何を教えてもらえるんだろう。)と、考えながら、楽しみに待っていた。しかし、その日から宮廣先生が稽古に来てくださることはなか

った。テレビを見ていたときに、祖母が、家のチャイムを鳴らして、私を呼んだ。

何かと思ってすぐ出た。すると、携帯電話を片手に持って、真剣そうな顔をした祖母から、「今さっきねえ、宮廣先生が、亡くなったんだって。」と、小さな声で言われた。祖母が帰っていった後、妹に、「どうしたん。」と、聞かれたけれど、自分でも信じられなくて、何も答えなかった。

お葬式には、仁方剣友会のみんなで行った。泣かずにお別れしよう決めていたけれど、宮廣先生の上に花をそえるとき、顔が見えて、一気に涙がこみ上がってきた。大粒の涙がたくさんスカートの上にポツポツと音をたてながら落ちていって、家に帰ってもなかなか泣きやめられなかった。

その日から数日たって、ある日、私は防具や竹刀を持って、車に乗っていた。空は、青くて、雲なんか一つもないくらい明るかった。

「美羽、試合頑張ってるね。」と、母が助手席から私の方にふり向いて、笑顔でそう言ってくれた。私は髪を結びながらうなづいた。信号が赤になって、車が止まった。私が窓の外を見たとき、宮廣先生のお葬式をしたところが見えて、私はふと気が付くと、ほほが上がっていた。そこには、宮廣先生の顔がうっすらと見えて、まるで「頑張れよ。」って応援してくださっているかのようだった。

あの日のことは、中学生になった今でも忘れない。

剣道は、私の宝物だ。